

へボノ木遺跡

— 第 73 次発掘調査報告 —

平成 30（2018）年 3 月
久留米市教育委員会

へボノ木遺跡

—第73次発掘調査報告—

平成30（2018）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、水や緑の豊かな自然に恵まれるとともに、交通の要衝に位置し、古来より筑後地方の中心都市として栄えてきました。近年も、これらの歴史や地域特性を活かし、福岡県第3の都市として発展してきましたが、少子・高齢化、高度情報化、エネルギー問題などの時代の潮流は、質的に深化、量的に拡大し、行政や市民、企業を取り巻く環境は常に変化しています。本市では、このような変化に対応するため、市民と行政がパートナーシップの理念の下に協働し、質の高い生活中心の都市づくりを目指しております。また、本市が誇る地域資源である「水と緑」を活かし、歴史が見えるまちを創り出すため、耳納山系の四季折々の自然を保全し、歴史風土を継承していきます。

市内各地には次代に継承すべき貴重な歴史遺産が多数存在しており、本書で報告するへボノ木遺跡もその一つで、宅地造成及び共同住宅建設に先立つ発掘調査として、平成28年度に実施したものです。発掘調査では縄文時代から中世までの遺構と遺物が出土し、貴重な成果を挙げることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月30日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、宅地造成及び共同住宅建設に先立ち、有限会社K Tハウジングと■■■■氏の委託を受けて実施したヘボノ木遺跡第 73 次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・田中樹子・中村麻衣・藤木幸子が行った。また、遺物の実測は担当者の他、当課の神保公久、非常勤職員の岩坪純子・宮崎彩香、臨時職員の石崎玲子・江口里織・古賀啓子が行い、浄書は岩坪・宮崎が実施した。なお、略図（1/50）は平板測量で、遺物出土状況図及び土層図（1/10）は水系メッシュ法で、その他の図面は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」で廣木が作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は廣木がマミヤ RB67 を使用しカラーリバーサル・モノクローム 6×7 判で撮影した。全景写真は有限会社空中写真企画に委託しカラーリバーサル・モノクローム 6×6 判で撮影した。また、遺物写真はニコン D700 を用いて当課の熊代昌之が撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S A - 柵列、S B - 掘立柱建物、S D - 溝、S I - 竪穴建物、S K - 土坑、S P - ピット、S X - 不明遺構を示す。
6. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面方位は座標北を示す。なお、平成 28 年に発生した熊本地震に係るパラメータ補正は行っていない。
7. 本調査の略記号はH B N - 073、調査番号は 201610 である。
8. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
9. 本書の執筆・編集は、廣木が実施した。

本文目次

I. はじめに	1
i. 調査に至る経緯	1
ii. 調査・報告書作成に係わる体制	1
II. 位置と環境	2
i. 地理的環境	2
ii. 歴史的環境	2
III. 調査の記録	4
i. 調査の目的と経過	4
ii. 検出遺構	4
iii. 出土遺物	15
IV. 総括	20
報告書抄録	巻末

挿図目次

第 1 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第 2 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	3
第 3 図 ヘボノ木遺跡第 73 次調査遺構配置図 (1/150)	折込
第 4 図 S A200 実測図 (1/60)	5
第 5 図 S B300 実測図 (1/60)	6
第 6 図 S D500 実測図 (1/30)	7
第 7 図 S I 250・555 実測図 (1/40)	8
第 8 図 S K12・20・60・100・120・280・320 実測図 (1/40)	10
第 9 図 S K350・375・380・385・390・470 実測図 (1/40)	12
第 10 図 S K495・505・560・570 実測図 (1/40)	14
第 11 図 S X50 実測図 (1/40)	14
第 12 図 S P378 実測図 (1/20)	15
第 13 図 S A200 P2、S D500、S I 555 出土遺物実測図 (26・29 : 1/2、25 : 1/3、その他 : 1/4)	16
第 14 図 S K100・280・320・390・470・570、S X50 出土遺物実測図 (47・48・56 : 1/2、40 : 1/3、その他 : 1/4)	17
第 15 図 S P112・264・336・378・600 出土遺物実測図 (1/4)	18

第 16 図	へボノ木遺跡南部弥生時代主要遺構模式図 (1/2, 000)	21
第 17 図	へボノ木遺跡南地区歴史時代主要遺構模式図 (1/1, 000)	22

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表①	19
第 2 表	出土遺物観察表②	20

図 版 目 次

図版 1	(1) 調査地から筑後国府Ⅲ期政庁跡、朝妻の清水方面を望む (北東から)	図版 5	(1) S K 350 完掘状況 (東から)
	(2) 1 区全景 (南西から)		(2) S K 375 完掘状況 (南東から)
図版 2	(1) 2 区全景 (南西から)		(3) S K 380 完掘状況 (北西から)
	(2) S A 200 完掘状況 (南西から)		(4) S K 385 完掘状況 (南西から)
	(3) S B 300 完掘状況 (南西から)		(5) S K 390 完掘状況 (南西から)
	(4) S D 500A - A' 間土層 (北東から)		(6) S K 470 土層 (南東から)
	(5) S D 500B - B' 間土層 (北西から)		(7) S K 470 遺物出土状況 (南東から)
図版 3	(1) S D 500C - C' 間土層 (南東から)	図版 6	(1) S K 505 完掘状況 (北東から)
	(2) S D 500 遺物出土状況① (南東から)		(2) S K 560 完掘状況 (西から)
	(3) S D 500 遺物出土状況② (北東から)		(3) S K 570 完掘状況 (北から)
	(4) S D 500 完掘状況① (南東から)		(4) S X 50 粘土塊検出状況① (南西から)
	(5) S D 500 完掘状況② (西から)		(5) S X 50 粘土塊検出状況② (南西から)
	(6) S I 250 完掘状況 (南西から)		(6) S X 50 完掘状況 (南西から)
	(7) S I 555 完掘状況 (北東から)		(7) S P 378 遺物出土状況① (南東から)
	(8) S K 12 完掘状況 (北東から)		(8) S P 378 遺物出土状況② (北東から)
図版 4	(1) S K 20 完掘状況 (東から)	図版 7	出土遺物①
	(2) S K 60 完掘状況 (南東から)	図版 8	出土遺物②
	(3) S K 100 土層 (南東から)	図版 9	出土遺物③
	(4) S K 100 完掘状況 (南西から)	図版 10	出土遺物④
	(5) S K 120 完掘状況 (北から)	図版 11	出土遺物⑤
	(6) S K 280 完掘状況 (南東から)	図版 12	出土遺物⑥
	(7) S K 320 完掘状況 (北西から)	図版 13	出土遺物⑦
	(8) S K 350 焼土検出状況 (東から)	図版 14	出土遺物⑧

I. はじめに

i. 調査に至る経緯

本調査は、久留米市東合川三丁目 209、210 - 1、210 - 2、216、217 における宅地造成と共同住宅建設に先立つ調査である。原因者は宅地造成部分が有限会社 K T ハウジング代表取締役 ████████ 氏、共同住宅建設部分が ████████ 氏であり、平成 28 年 5 月 12 日に当該地にかかる「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。一帯は周知の遺跡であるヘボノ木遺跡に含まれ、隣接地で実施された第 48・51 次調査等の結果から縄文時代から中世に至る遺構が展開していることが想定された。その後の確認調査においても遺構を確認したことから、開発対象地内の道路敷設部分及び共同住宅建設部分について発掘調査が必要である旨を回答した。その後、協議を重ね、調査費用を原因者負担とすることと、発掘調査を平成 28 年度、報告書作成を平成 29 年度に実施することで合意に至った。協議結果を受け、平成 28 年 6 月 13 日に両氏から「発掘調査の依頼」が提出され、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成 28 年 7 月 15 日に各氏と久留米市は「ヘボノ木遺跡における埋蔵文化財に関する協定書」及び「平成 28 年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。

調査期間は、平成 28 年 8 月 1 日から平成 28 年 10 月 28 日までである。また、出土品整理・報告書作成作業は平成 29 年 5 月 1 日に「平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査報告書作成委託契約書」を取り交わし、実施した。報告書作成期間は平成 29 年 5 月 22 日から平成 30 年 3 月 31 日までである。

ii. 調査・報告書作成に係わる体制

調査委託：有限会社 K T ハウジング 代表取締役 ████████

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：大津秀明(平成 29 年度) 堤 正則(平成 28 年度)

調査総括：市民文化部 部 長：野田秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：西村信二(平成 29 年度) 竹村政高(平成 28 年度)

文化財保護課 課 長：馬場博文

課長補佐：白木 守 山崎万里子

主 査：水原道範

事務主査：豊福早苗 塚本映子

調査担当：廣木 誠

整理担当：米澤美詠子 岩坪純子 宮崎彩香

発掘調査臨時職員(平成 28 年度)

高尾春代、田中樹子、中村麻衣、藤木幸子、丸山幸、迎直樹、由布幸子、渡辺しげ子、渡辺やつ子

発掘調査整理臨時職員(平成 29 年度)

猪俣弘治、後藤とみ子

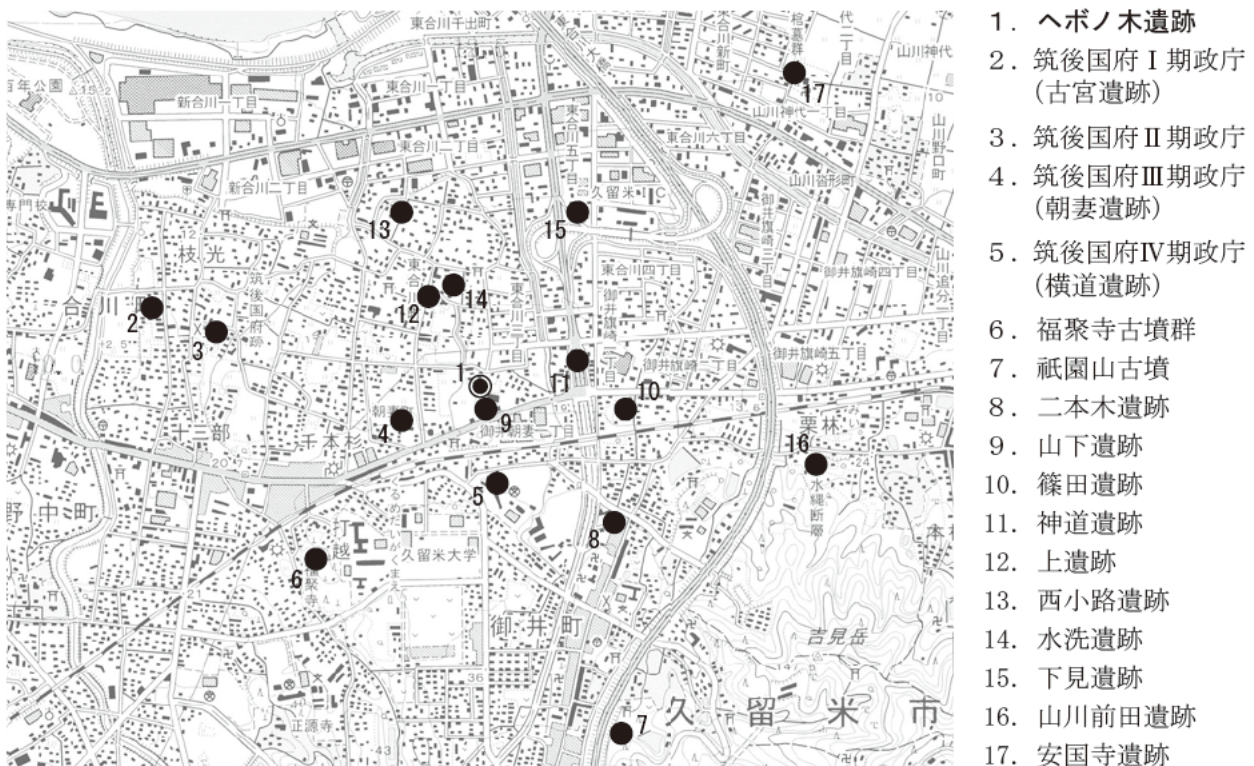
II. 位置と環境

i. 地理的環境

へボノ木遺跡は久留米市街地の東方 4.0 km に位置し、付近には九州縦貫自動車道をはじめ、国道 322 号、JR 久大本線といった交通網が発達している。遺跡の北方 1.5 km には阿蘇外輪山に源を発する筑後川が西流して有明海へと注ぎ、南東 2.0 km には緑豊かな耳納山地が聳える。この耳納山地の北麓には活断層である水縄断層が眠っており、その断層活動によって形成された断層崖下にはいくつもの湧水が見られる。これらの湧水は小河川となって台地を開析しつつ筑後川へと注ぐ。また、耳納山地西端にあたる高良山麓には高良三泉と称される「朝妻の清水」「岩井の清水」「徳間の清水」が湧出する。こうした豊かな水と緑に恵まれた環境の下、周辺には縄文時代以降の遺跡が連綿と営まれ、市内でも最も遺跡が集中する地域となっている。へボノ木遺跡もその一つであり、東の中谷川、西の井田川に挟まれた標高 13m 前後の低位段丘上に立地する。

ii. 歴史的環境

周辺では縄文時代から人々の生活痕跡が顕著に確認でき、同時代の遺跡は草創期にまで遡る。高良山の西方、中位段丘上に位置する横道遺跡からは、筑後地域で最古段階に位置付けられる草創期の隆起線文土器や続円孔文土器をはじめ、後期を除く全時期の遺物が出土し、集石遺構や焼土遺構も検出されている。一方、横道遺跡の北方に広がる低位段丘上には神道遺跡（後・晩期）、へボノ木遺跡（早～晩期）、朝妻遺跡（前・後期）、上遺跡（早・晩期）、水洗遺跡（前期）、西小路遺跡（後・



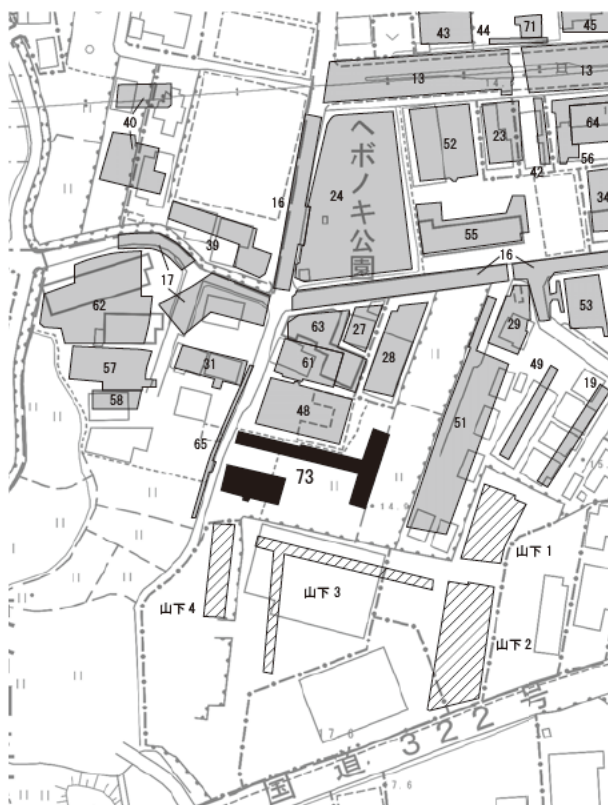
第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

晩期)といった遺跡が展開する。中でも、西小路遺跡では後期の御領式段階の竪穴住居から東日本との関わりを推察させる石冠・石棒が出土し、精神文化の側面からも注目される。

弥生時代になると二本木遺跡やへボノ木遺跡で中期後半の集落が形成される。二本木遺跡では幅約5mの大溝が少なくとも120m以上にわたって直線的に掘削されており、多くの丹塗土器が出土している。該期の焼失住居が多いことも特徴的である。終末期には朝妻遺跡やへボノ木遺跡で舶載鏡を伴う竪穴住居が確認された。また、古宮遺跡では終末期から古墳時代初頭にかけて幅6m、深さ1.5m、長さ300m以上に及ぶ大溝が直線的に掘削される。周囲には100軒以上の竪穴住居が営まれ、豊富な鉄製品や肥前型器台も出土しており、終末期の集落では筑後川を介した他地域との交流が垣間見える。

古墳時代の遺構は、へボノ木遺跡周辺ではほとんど確認されておらず不明な点が多いが、高良山裾部に築かれた祇園山古墳は筑後地方最古の方墳で、箱式石棺を内部主体とする。現在高良大社に伝わる三角縁神獣鏡は同古墳出土と云われるものであるが、考古学的確証はない。また、平成16年度に調査された福聚寺古墳群では2基の方墳が確認された。時期を特定できる遺物は希薄であるが、祇園山古墳に後出するものと想定されている。

7世紀後半～8世紀中頃、へボノ木遺跡では中央地区に四面廂建物を伴う回廊状遺構が造営され北・南地区には多くの竪穴住居が営まれる。遺跡の性格については大きく、回廊状遺構の東側・南東側には倉庫と見られる総柱建物も存在し、回廊状遺構を群庁、倉庫を正倉と見てへボノ木遺跡を御井郡衙とする説と、調査で出土する多くの瓦や、「寺」銘を記した墨書・刻書土器、密教的色彩の濃い土師器香炉や三鈷杵置台の存在などから寺院とする説の2者があり、遺跡の性格は未だ確立していないのが現状である。また、へボノ木遺跡の西を流れる井田川を挟んだ西方には、7世紀末から12世紀後半に至るまで営まれた筑後国府が存在する。筑後国府ではこれまでの継続調査によって政庁が西方の古宮地区から南東の横道地区に至るまで三遷することが明らかになっており、東方に位置する神道遺跡も含めて、この地域が古代における筑後地方の政治・経済・文化・交通の中心を担っていたことが窺える。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

Ⅲ. 調査の記録

i. 調査の目的と経過

調査対象地は遺跡の南西部に所在する。周辺では本調査地の北側で第 27・31・48・51・57・61・63・65 次調査などを実施し、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が検出されている。中でも注目されるのは古代で、第31次調査 S B 1850、第48・65次調査 S B 2407、第57次調査 S B 2550が検出された。これらは計画的な配置を構成する東西棟建物で、8 世紀後半から 9 世紀代の建物群と推察されており、同時併存の可能性も指摘されている。また、南地区で最大の規模を有することからも、当地区で最も中心的な建物と考えられる。一方、調査地の南側に接する山下遺跡においては第 1～4 次調査（第 1～3 次調査は未報告。）を実施した。第 4 次調査では上記建物と同時期の土坑が検出され、猿面硯も出土していることから、関連施設が断層崖付近にまで広がる可能性が指摘された。以上、周辺の調査成果から、本調査地にも該期の関連施設が展開する可能性があり、上記建物の南側における土地利用の把握を主な目的として、調査を実施した。

現地調査は平成 29 年 8 月 1 日に重機搬入と、対象地内の草刈りから着手した。草刈りを終えた 8 月 2 日に 1 区の表土剥ぎを開始する。翌日午後には作業員を投入し周辺整備を行う。8 月 4 日より遺構検出及び平板測量を実施し、略図作成が終了した 1 区西側より遺構の掘削を開始した。実測作業、写真撮影は随時行い、8 月 30 日に 1 区の調査と並行し 2 区の表土剥ぎに着手する。9 月 1 日、台風 12 号に備え、現場養生。9 月 6 日に現場復旧及び 2 区の遺構検出作業に取りかかる。9 月 15 日には略図作成を終え、2 区西側から遺構掘削を始める。9 月 16 日、台風 16 号に備え、現場養生。9 月 21 日、現場復旧作業を行う。9 月 23 日に 1 区の全景写真撮影後、S A 200 の補足調査を実施する。10 月 4 日、台風 18 号に備え、現場養生。10 月 6 日、現地作業を再開し、10 月 13 日にはようやく 1 区の埋め戻しを終了した。10 月 26 日に 2 区の全景写真を撮影し、午後には S B 300 の補足調査及び埋め戻しを行う。10 月 27 日に埋め戻しを完了し、翌 28 日に機材を撤収し、全ての現地作業を終了した。

ii. 検出遺構

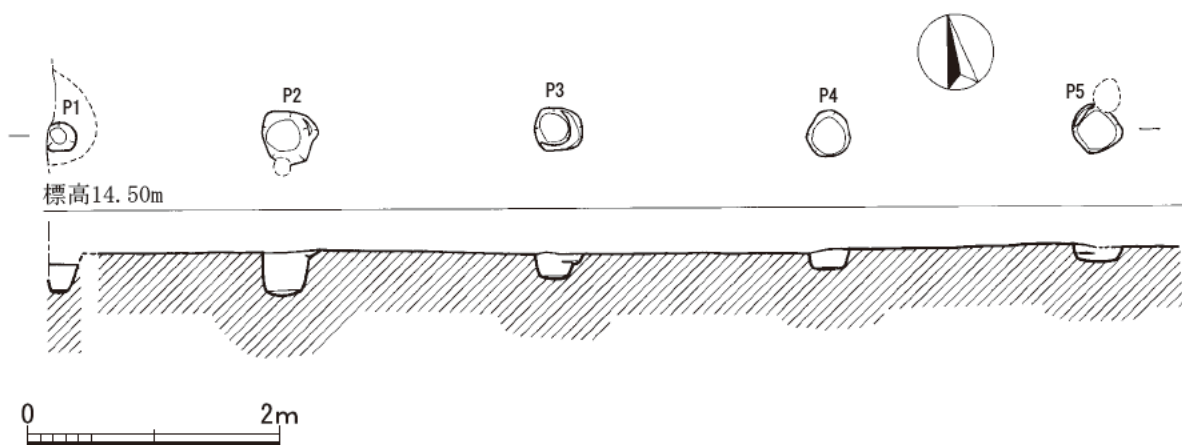
調査区は対象地南西の共同住宅建設部分と、その北から東にかけて T 字状を呈する道路敷設部分の 2 箇所からなる。便宜上、前者を 1 区、後者を 2 区とし、遺構番号については通し番号とした。

調査対象地の現況は畑地で、周辺地形は南東から北西へ緩傾斜をなす。基本層序は、対象地南東部ほど削平が著しく、表土直下で遺構検出面である地山（明褐色）に至る。他方、対象地の北東部・北西部では表土直下に黒色の遺物包含層が認められた。包含層上位で間層を確認できなかったため、畑地造成時に削平を受けたものと推察される。本調査における検出面までの深さは、1 区が東部で 30cm、西部で 40 cm を測る。また、2 区が南東部で 20cm、北東部で 40cm、西部で 60cm であった。検出面の標高は約 14.0～14.4m で北西方向へ比高を減じる。主要遺構は、柵列 1 条、掘立柱建物 1 棟、溝 1 条、竪穴建物 2 軒、土坑 17 基、不明遺構 1 基である。以下、各遺構について詳述する。

柵列

S A200 (第4図, 図版2)

1区南西で検出した。検出時には平面形式が4間以上×2間以上の建物と想定されたが、補足調査の結果、東側柱列が確認できなかったため柵列と判断した。総延長 8.2m以上を測る柵列で、計画方位はN - 80.1° - Wである。柱穴の平面形は楕円形を呈し、攪乱を受けていないもので0.35～0.45mの平面規模を有し、深さ 15～35cm を測る。柱痕は確認できなかった。柱間距離は柱穴下端の芯々距離で、東から 2.1、2.2、2.1、1.8mである。掘方埋土内からは土師器の皿・坏・埴・高台片・甕、黒色土器A類片が出土した。



第4図 S A200 実測図 (1/60)

掘立柱建物

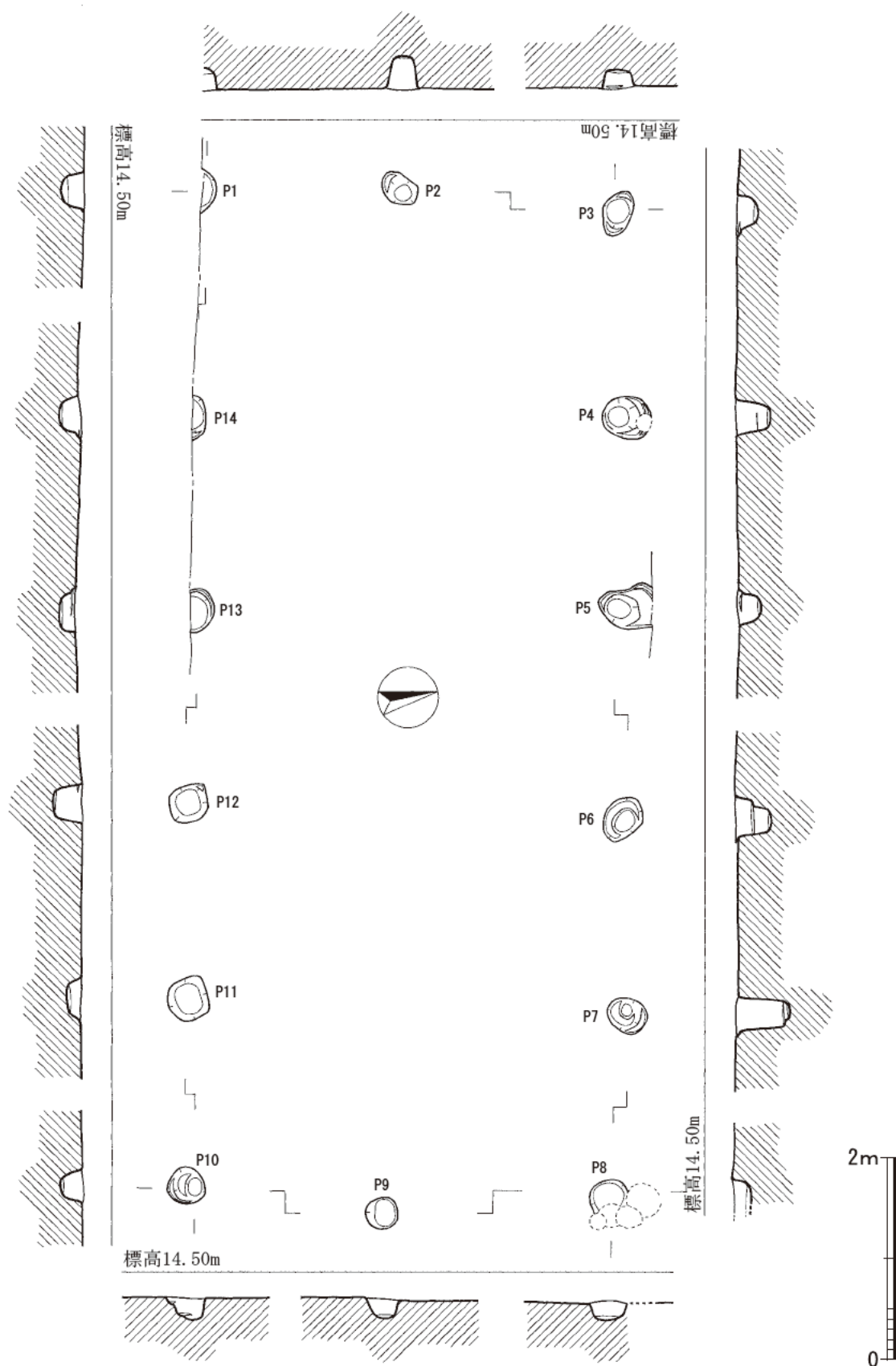
S B300 (第5図, 図版2)

2区東側で検出した。平面形式5間×2間の東西棟建物で、計画方位はN - 13.5° - Eを指向する。P 7がS K505に後出する。柱穴は楕円形・長円形を呈し、平面規模は0.28～0.52mで、深さは15～52cmを測る。柱痕確認のため、段下げ及び断割調査を実施したが、柱痕は確認できなかった。柱間距離は下端芯々で、東側柱列が北から 2.2m、1.9mで、北側柱列が東から 1.8m、1.9m、2.1m、1.9m、2.0mである。掘方埋土からは土師器の坏・埴・甕の細片及び須恵器細片が出土したのみで、詳細な時期特定は困難である。なお、土師器坏の底部処理にはヘラ切りのみが確認でき、板目は未確認である。また、糸切りも含まれていなかった。

溝

S D500 (第6図, 図版2・3)

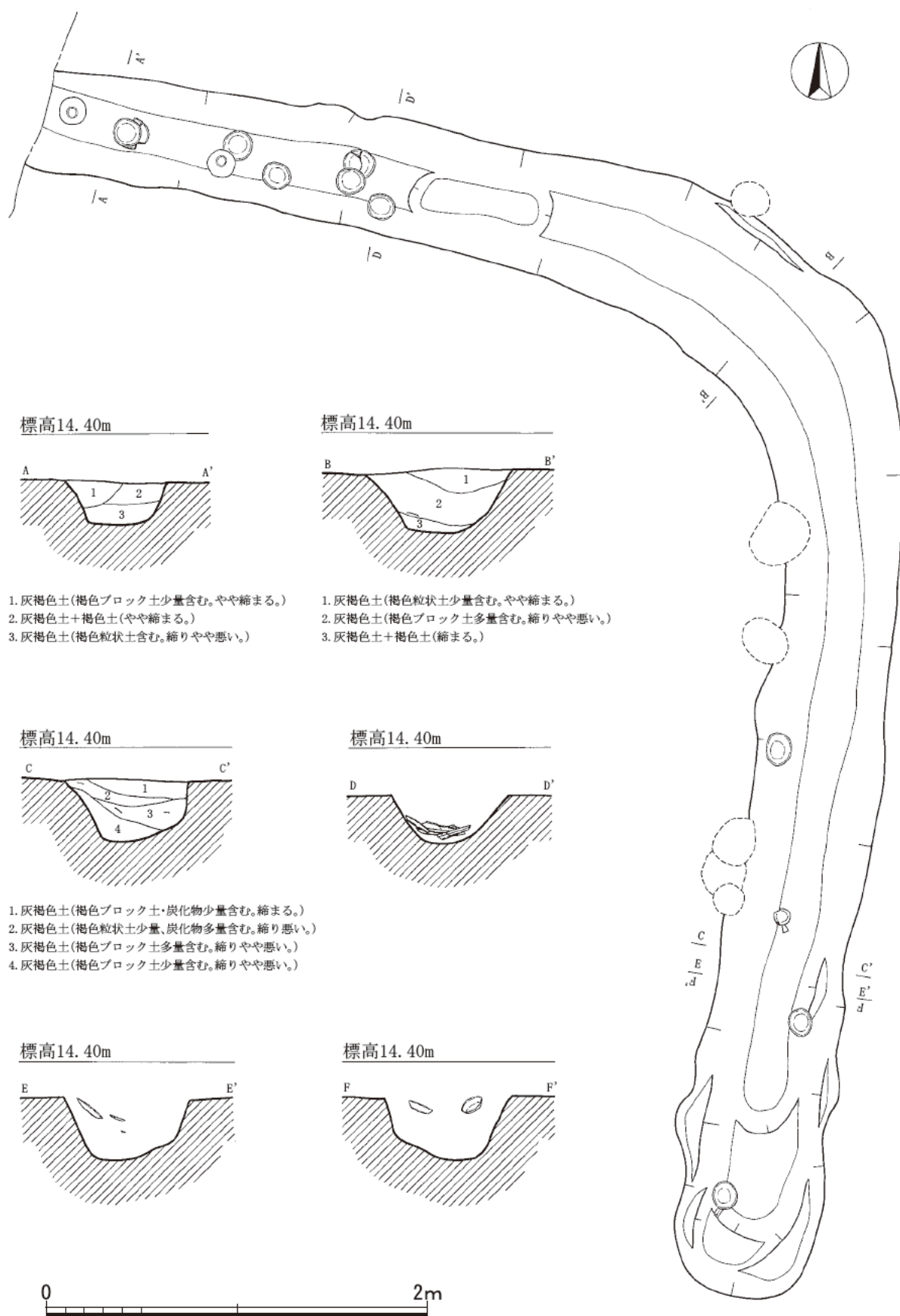
2区東側で検出したL字状を呈する溝で、S K560に後出する。検出長は東西約8m、南北約10mで西側は調査区外に延びる。幅は西側が0.5m、北東コーナー付近が0.7m、南側が0.65m程度である。深さは25～35cmで、底面レベルは若干の高低差はあるが標高 13.9m前後を測り、ほぼ水平であった。埋土は灰褐色を呈し、全体的にブロック土を含む。コーナー付近から南側はレンズ状に、北西部は水平堆積の様相を呈する。埋土内からは土師器皿、坏・埴・托・甕・鉢、黒色土器A



第5図 S B 300 実測図 (1/60)



第3図 ヘボノ木遺跡第73次調査遺構配置図 (1/150)



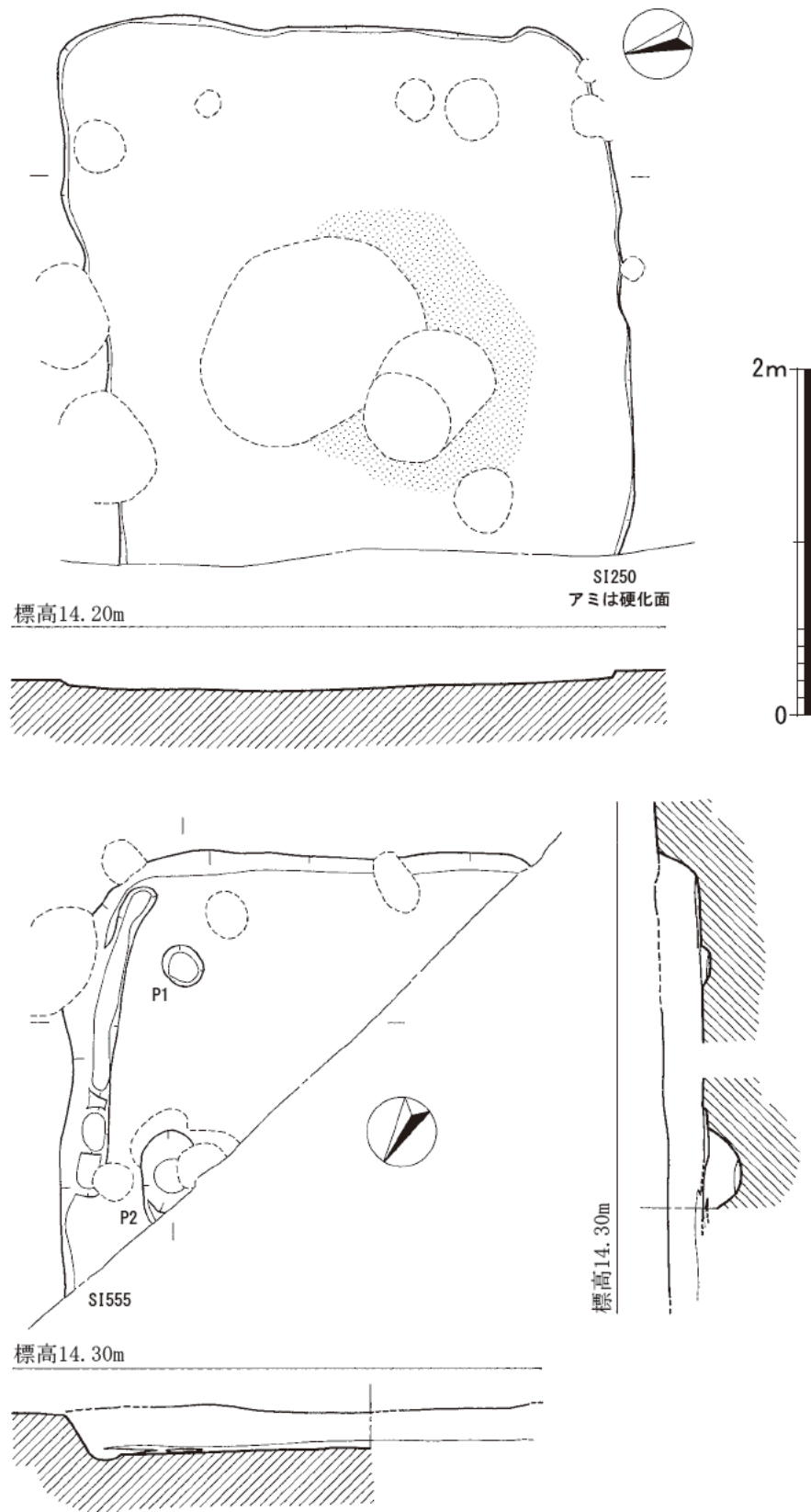
第6図 S D500 実測図 (1/30)

類片、黒色土器B類片、須恵器坏・埴・壺・甕、瓦器埴、白磁片、青磁片、砥石・滑石製石鍋片・石鍋転用品、不明鉄製品・釘が出土した。土師器の皿・坏及び瓦器埴は、完形に近い状態のものが多く出土しており、特に北西部下層に集中する。それらの出土状態は正立するもの、倒立するものなど多様であり、埋土の状況からも一括廃棄されたものと推察される。なお、西側隣接地で実施された第48次調査では本遺構の西側延長部は検出されていない。

竪穴建物

S I 250 (第7図, 図版3)

2区西端で検出した。S K 280 に先出する。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と考えられ、規模は東西長3.15m以上、南北長3.2mを測り、深さは11cmと浅い。支柱穴及び付帯施設を確認することはできなかったが、底面中央付近は周囲と



第7図 S I 250・555 実測図 (1/40)

比較し、やや硬化する。埋土は明黒灰色土で明褐色ブロック土を少量含む。埋土内からは土師器の坏・甕の細片と、弥生土器片6点、黒曜石剥片1点が出土したのみである。

S I 555 (第7図, 図版3)

2区東側で検出した。遺構の西半が調査区外に延びる。平面形は方形もしくは長方形と推察される。検出規模は東西長2.7m以上、南北長2.55m以上を測り、検出面から深さ27cmで床面に達する。底面では2基のピットと壁溝を確認した。ピットは柱穴と考えるには非常に小規模で、特にP1の深さは僅か6cmであるため、主柱構造については不明と言わざるを得ない。壁溝は東壁沿いに部分的に認められ、幅が0.15m前後、最深部が5cmである。埋土は灰褐色土で、にぶい褐色ブロック土を多く含み、やや締まる。また、少量の炭化物も認められた。竪穴部の埋土内からは弥生土器の甕、サヌカイト・黒曜石製剥片、土製投弾が、P1からは弥生土器の甕、P2からは黒曜石製剥片が出土している。

土坑

S K12 (第8図, 図版3)

1区南西端で検出した。平面形は方形あるいは長方形を呈すると考えられる。検出規模は東西長1.05m以上、南北長1.1m以上、深さ25cmを測る。底面は坑内北東で確認し、その西側と南側にステップを有する。埋土は、黄白色ブロック土を含む灰褐色土で、埋土内からは土師器の坏片、弥生土器片が出土した。なお、土師器坏片には底部片11点が含まれ、いずれもヘラ切りにより底部処理を施したものである。

S K20 (第8図, 図版4)

1区西側付近で検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸長0.95m、短軸長0.7m、深さ5cmを測る。底面断面形は水平で、残存状況が悪いため壁面の状況は不明である。埋土は黒灰色土で、橙色ブロック土を含む。埋土内からは土師器坏片、黒色土器A類片が出土した。

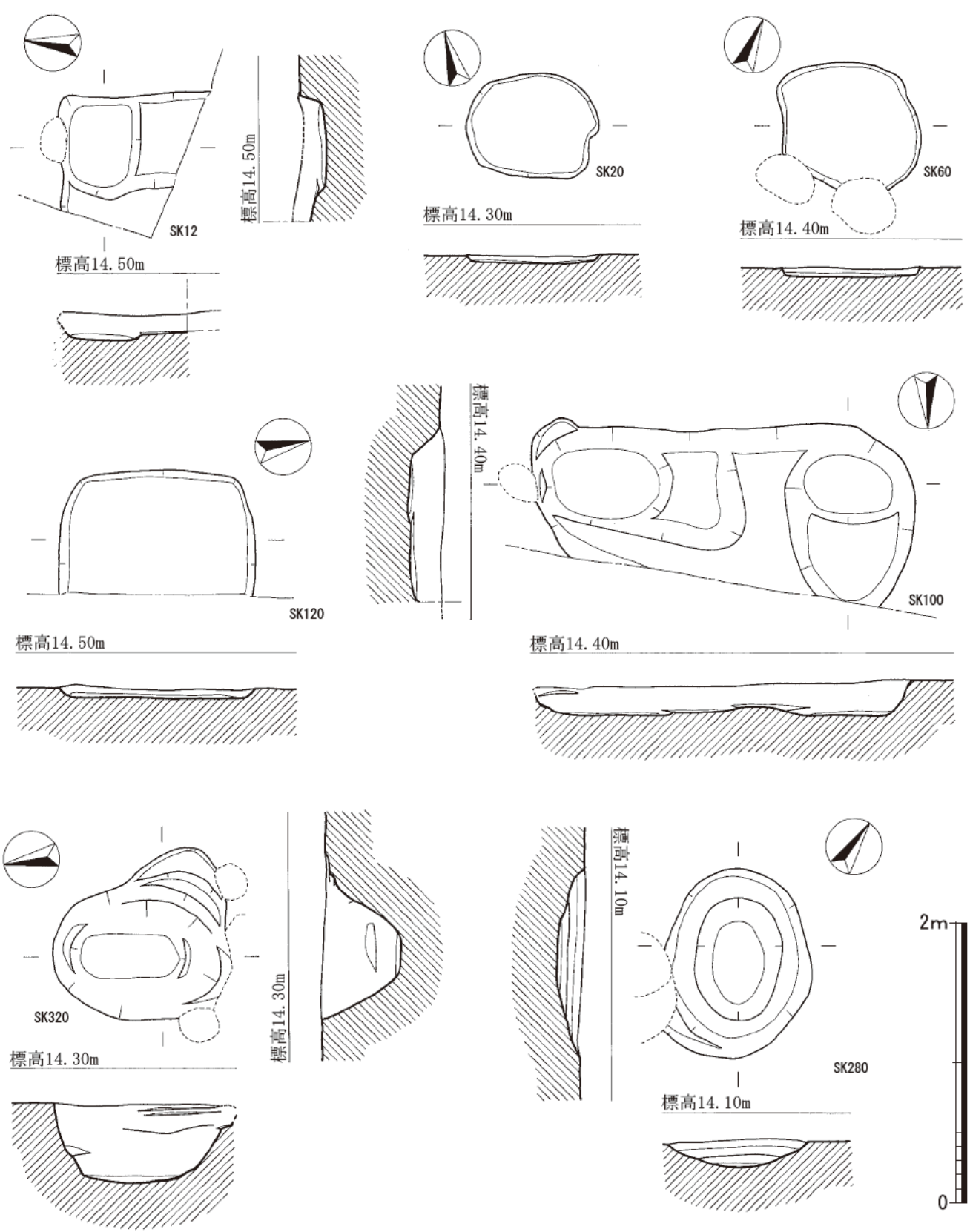
S K60 (第8図, 図版4)

1区中央西側で検出した。平面形は歪な長円形で、規模は長軸長1.1m、短軸長0.9m、深さ7cmを測る。底面断面形は水平であるが、壁面の状況は不明である。埋土は黒灰色の単層で、炭化物を含む。埋土内からは土師器坏・埴・甕、黒色土器A類片、黒色土器B類片、須恵器の甕、黒曜石製剥片及び石核が出土した。

S K100 (第8図, 図版4)

1区北東で検出した廃棄土坑である。遺構の北側は調査区外に至るが、平面形は東西に長い小判形あるいは倒卵形と推察される。規模は長軸長2.72m、短軸長1.25m以上を測る。底面は坑内の東西端部で確認し、いずれも検出面から25cmの深さである。埋土は黒灰色土で、上下2層がレンズ状に堆積していた。上層は炭化物と多くの遺物を含み、締まった土壌であるのに対して、下層は遺物が少なくブロック土を多く含み、土壌の締りが悪い。埋土内からは土師器の皿・坏・埴・托・甕、黒色土器A類鉢、黒色土器B類片、須恵器壺・甕、砥石、古瓦が出土した。

Ⅲ. 調査の記録



第8図 SK12・20・60・100・120・280・320 実測図 (1/40)

S K120 (第8図, 図版4)

1区東端で検出した。遺構東側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形は方形あるいは長方形と考えられる。規模は長軸長 1.4m、短軸長 0.9m以上、深さ 9cm を測る。底面断面形は水平で、壁面は緩やかに立ち上がるものと推察される。埋土は乳白色ブロック土を含む黒灰色土で、締まる。埋土内からは土師器坏片が 5 点、須恵器壺・甕片が各 1 点出土したのみである。

S K280 (第8図, 図版4)

2区西端で検出した。S I250 に後出する。平面形は倒卵形を呈し、規模は長軸長 1.35m、短軸長 1.0m、深さ 20cm を測る。底面断面形はほぼ水平で、壁面は緩やかに立ち上がり、底面周囲に巡る狭長なステップを経て、上端に至る。また、坑内南側には弓状を呈するステップが確認できる。埋土は黒灰色土で、褐色ブロック土を含み、よく締まる。埋土内からは土師器の坏・甕・甑片が出土した。

S K320 (第8図, 図版4)

S K280 の東 17m で検出した。平面形は不整形で、東西長 1.21m、南北長 1.25m以上、深さ 55cm を測る。底面断面形はレンズ状を呈し、壁面は内湾気味に立ち上がる。坑内では狭長なステップが検出された。南側に多く確認でき、南東部は浅い階段状を呈している。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土で、よく締まる。埋土内からは縄文土器浅鉢・鉢、サヌカイト・黒曜石製剥片が出土した。

S K350 (第9図, 図版4・5)

S K320 の北東 2m で検出した。遺構の北側は調査区外に至る。平面形は方形もしくは長方形と推察される。検出規模は長軸長 1.55m、短軸長 0.77m以上、深さ 5cm を測る。坑内の北東部では焼土粒が集中して検出され、東西 1.05m、南北 0.35m の範囲に広がる。この下部は底面である地山が被熱し赤橙色を呈していた。埋土は明褐色土で灰黒色ブロック土・焼土粒・炭化物を含み、締りが悪い。埋土内から遺物は出土しなかった。

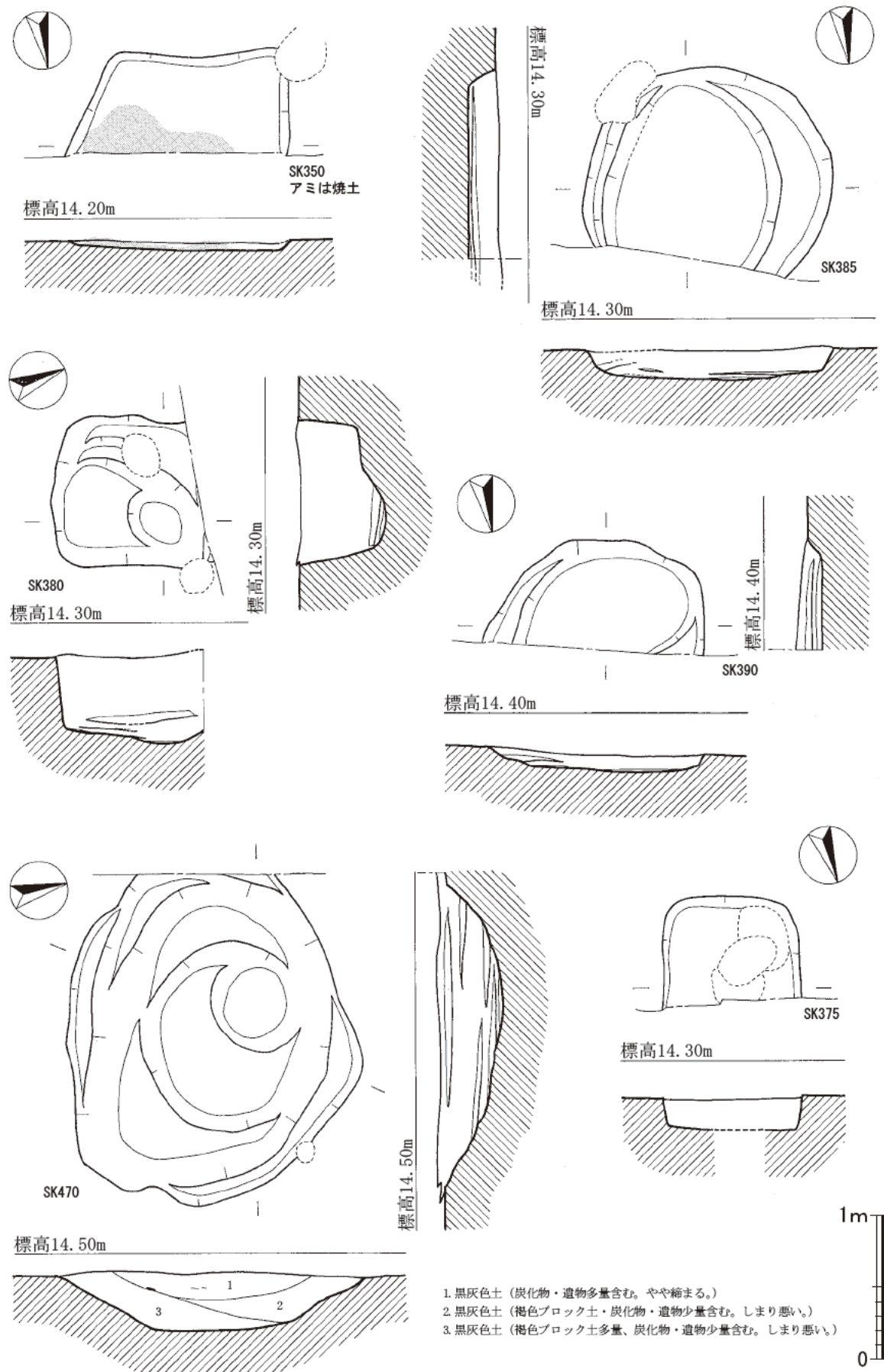
S K375 (第9図, 図版5)

S K350 の東 4m で検出した。平面形は方形あるいは長方形と考えられる。規模は長軸長 0.95m、短軸長 0.65m以上、深さ 20cm を測る。底面はほぼ水平で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は褐色ブロック土を少量含む灰黒色土で、締まる。埋土内からは土師器坏片 4 点、甕片 7 点、須恵器蓋片 1 点が出土した。

S K380 (第9図, 図版5)

S K375 の東 1.5m で検出した。遺構の北側が調査区外に延びるが、北壁の立ち上がりは確認できなかったため、平面形は隅丸方形と推察される。規模は長軸長 1.1m程度、短軸長 1.05m を測る。底面は検出面から 55cm の深さを測り、坑内東半で確認した。その北側はピット状に僅かに掘り窪められている。埋土は灰黒色を呈し、黄白・黒・褐色ブロック土を多量に含んでおり、人為的に埋められたものと考えられる。埋土内からは土師器の坏・甕片及び黒曜石製剥片が出土した。総量は小袋 1 袋に満たない。

III. 調査の記録



第9図 SK350・375・380・385・390・470 実測図 (1/40)

S K385 (第9図, 図版5)

S K380 の東 1m で検出した。平面形は楕円形を呈するものと推察される。規模は東西長 1.7m、南北長 1.45m 以上を測り、深さ 24cm である。底面平面形は小判形を呈し、東西両側にステップを有している。埋土はにぶい褐色土で、炭化物を多く含み、よく締まる。埋土内からは土師器の皿・坏・埴・甕、黒色土器B類埴、須恵器甕、陶磁器片、瓦器埴が出土している。

S K390 (第9図, 図版5)

S K385 の東側で検出した。平面形は楕円形であろうか。規模は東西長 1.53m、南北長 0.8m 以上、深さ 18cm を測る。底面平面形は小判形あるいは倒卵形と推察され、東西端部にステップを有する。遺構の北半が調査区外に延びるため全容は不明であるが、S K385 と形状が類似している。埋土は灰褐色土で、焼土、炭化物を多く含み、よく締まっていた。埋土内からは土師器皿・坏・埴・甕、須恵器埴・甕、瓦器片、白磁片、鉄滓が出土した。

S K470 (第9図, 図版5)

2区南東部で検出した。平面形は倒卵形を呈し、規模は長軸長 2.3m 以上、短軸長 2.0m、深さ 45cm である。底面の平面形は楕円形で、0.4~0.5m 程の規模を有し、上端と比し矮小である。底面周囲には複数のステップが設けられているため、断面形状は概ね階段状を呈する。埋土は3層を確認し、いずれも黒灰色を基調とする土壌で、上層ほど遺物が多く、下層ほどブロック土を多く含んでいた。埋土内からは土師器皿・坏・埴・甕、黒色土器A類埴、黒色土器B類片、須恵器蓋・坏・埴・甕、鉄製釘が出土した。なお、検出面では古瓦小片も採取している。

S K495 (第10図, 図版5)

S K470 の北 11m で検出した。平面形はやや歪な隅丸方形である。規模は長軸長 1.04m、短軸長 0.77m、深さ 11cm を測る。底面の断面形はレンズ状を呈し、壁面は西側が外傾し、その他が垂直気味に立ち上がるものと推察される。埋土は灰褐色土で、にぶい橙色ブロック土を少量含んでおり、締りは悪い。埋土内からは土師器蓋・坏・甕、須恵器坏及び黒曜石製剥片が出土した。土器はいずれも細片である。

S K505 (第10図, 図版6)

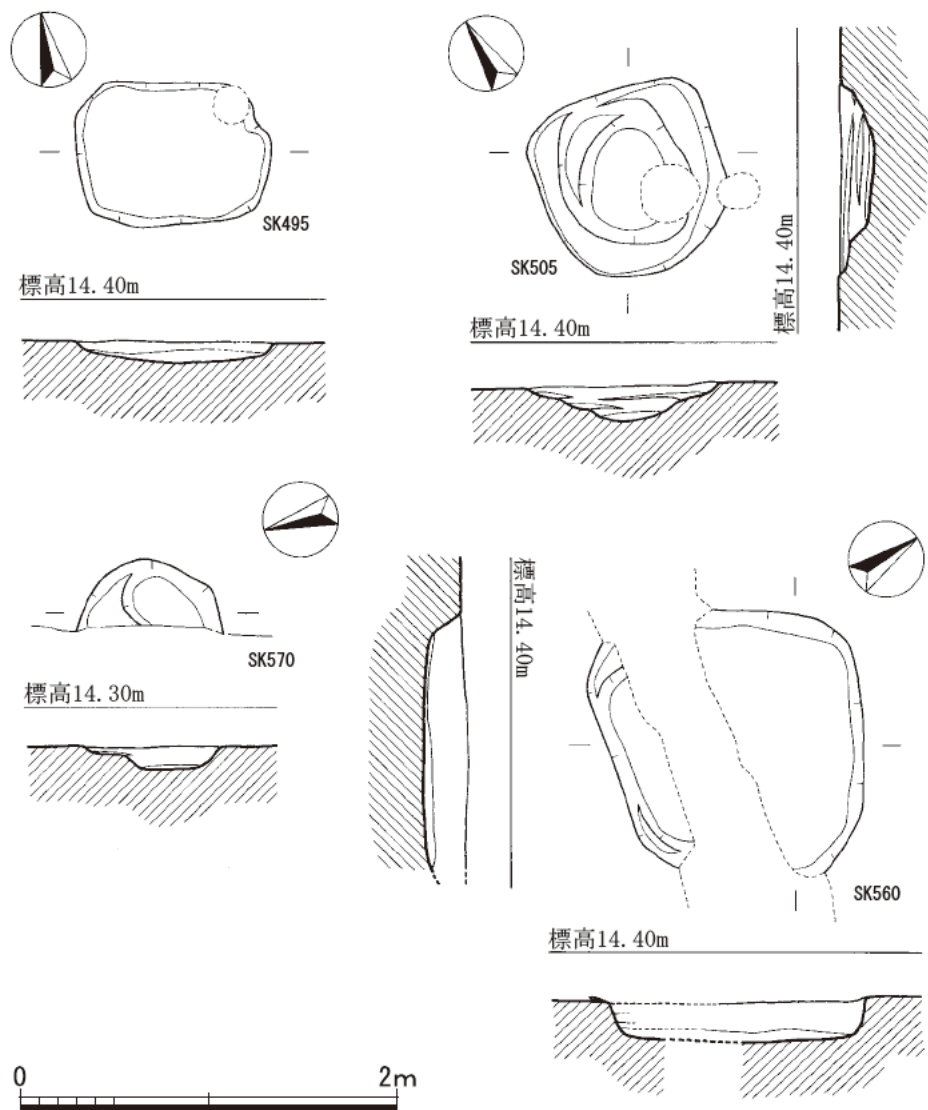
S K495 の南 1.5m で検出した。S B300 P 7 に先出する。平面形は隅丸方形に近似し、規模は長軸長 0.98m、短軸長 0.96m、深さ 20cm を測る。底面の平面形は倒卵形を呈し、周囲には狭長なステップが認められた。埋土は黒灰色土の単層で、埋土内からは土師器片が5点出土したのみで、時期の特定は困難である。

S K560 (第10図, 図版6)

S K505 の北 2m で検出した。S D500 に先出する。平面形はやや歪な隅丸方形で、規模は東西長 1.36m 以上、南北長 1.44m、深さ 24cm である。底面断面形はレンズ状を成し、壁面は西側と南側が緩やかに、北側が垂直気味に立ち上がり、上端に至る。埋土は灰褐色土で黄白・褐色ブロック土と焼土を含み、締りは悪い。埋土内からは遺物は出土しなかった。

SK570 (第10図, 図版6)

SK560 の北西2mで検出した。西半が調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形は楕円形と推察される。規模は東西長 0.35m以上、南北長 0.78m、深さ 13cm を測る。底面は坑内南側で確認し、その北側には半円状のステップが設けられ、比高 7cm である。埋土は褐色ブロック土を多く含む黒灰色土で、締まる。埋土内からは土師器の坏・甕、須恵器の埴が出土した。

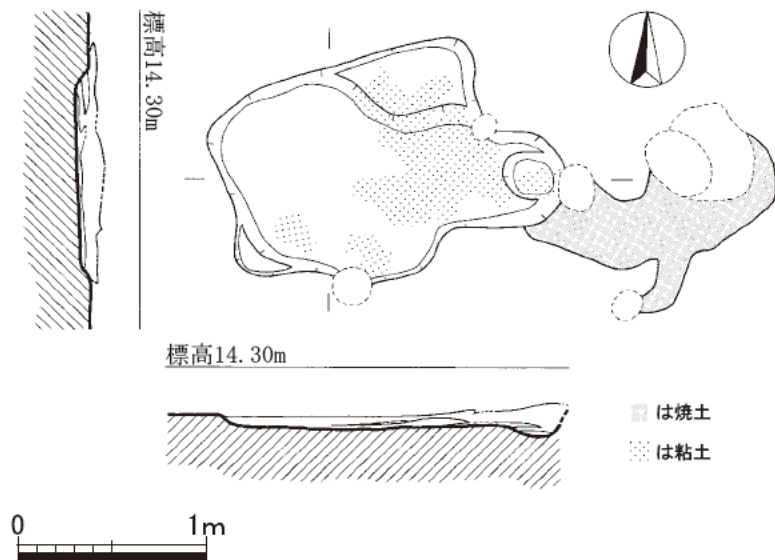


第10図 SK495・505・560・570 実測図 (1/40)

不明遺構

SX50 (第11図, 図版6)

1区中央部北西よりで検出した。平面形は東側の一部が突出した略方形である。規模は東西長 1.9m、南北長 1.3m、深さ 14cm を測る。底面断面形は水平で、南西隅及び北東隅に比高 4cm 程度のステップを有する。また、東側の突出部は底面から 5cm 深く掘



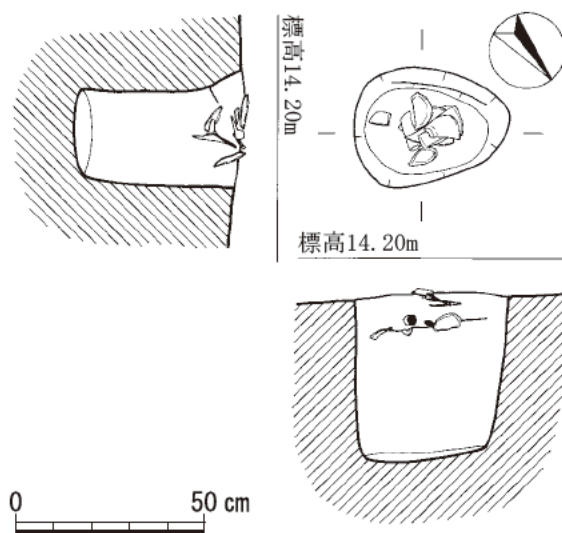
第11図 SX50 実測図 (1/40)

り下げられ、ピット状を呈している。坑内からは、焼土粒・炭化物を含む黄白色粘土塊が、特に東半に集中して検出された。土層観察の結果、粘土塊は底面から5～8cm浮いた状態であることが判明し、底面が被熱していないことから、廃棄時の堆積と考えられる。埋土中から土師器の甕が出土した。なお、東側の突出部から連なるようにして、地山直上に焼土粒が確認された。本遺構との関係については詳細を明らかにできなかったが、その分布範囲は第11図の通りで、東西1.33m、南北0.96mの範囲に歪に広がっていた。

ピット

S P 378 (第12図, 図版6)

2区西側、S K 320の北西0.5mで検出した。平面形は倒卵形を呈し、規模は長軸長0.41m、短軸長0.31m、深さ45cmを測る。底面断面形はレンズ状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土内からは土師器の皿・坏・埴・器台、須恵器の甕が出土した。これらの遺物の大半は上位で出土し、最終埋没段階で一括廃棄されたものと推察される。



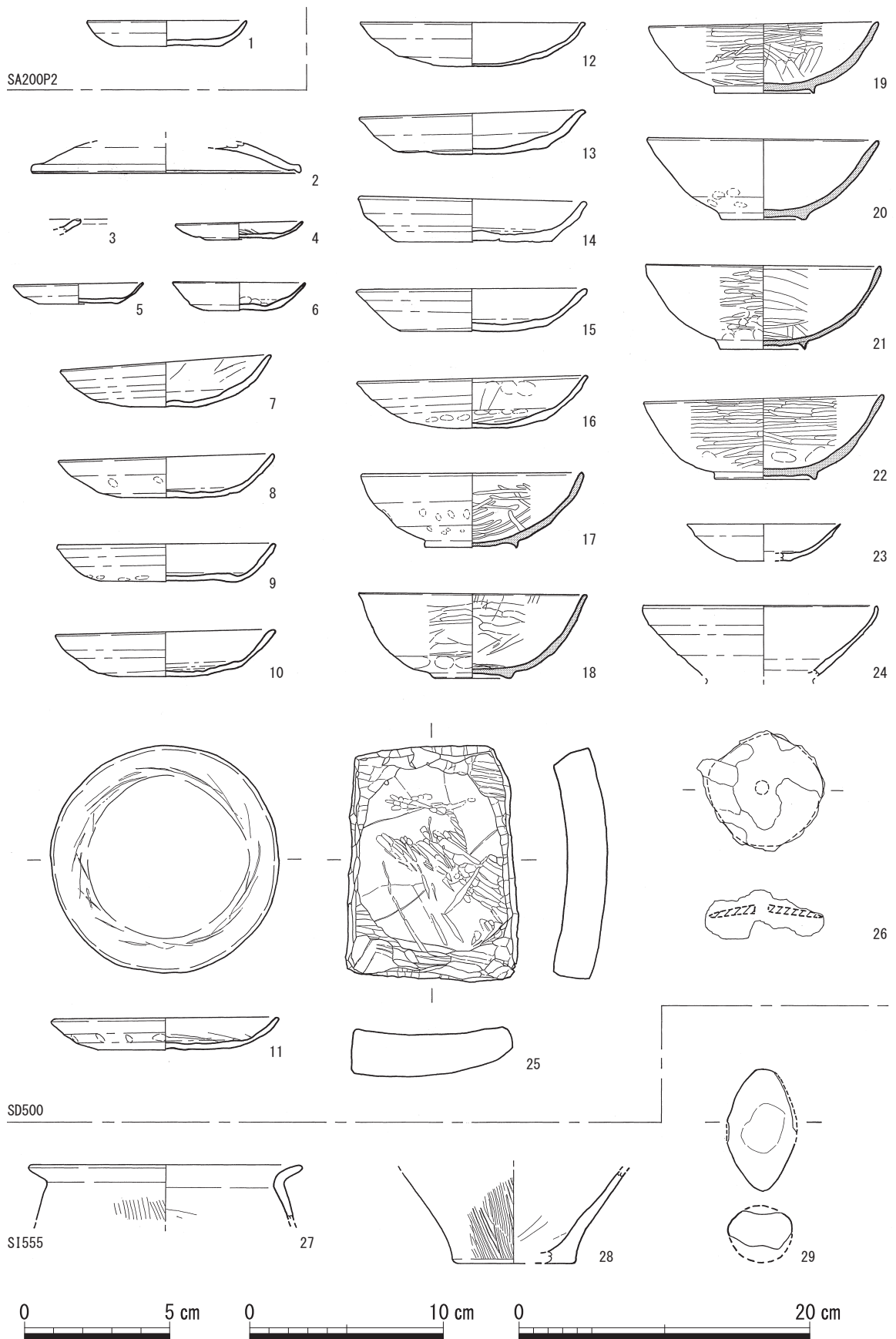
第12図 S P 378 実測図 (1/20)

iii. 出土遺物

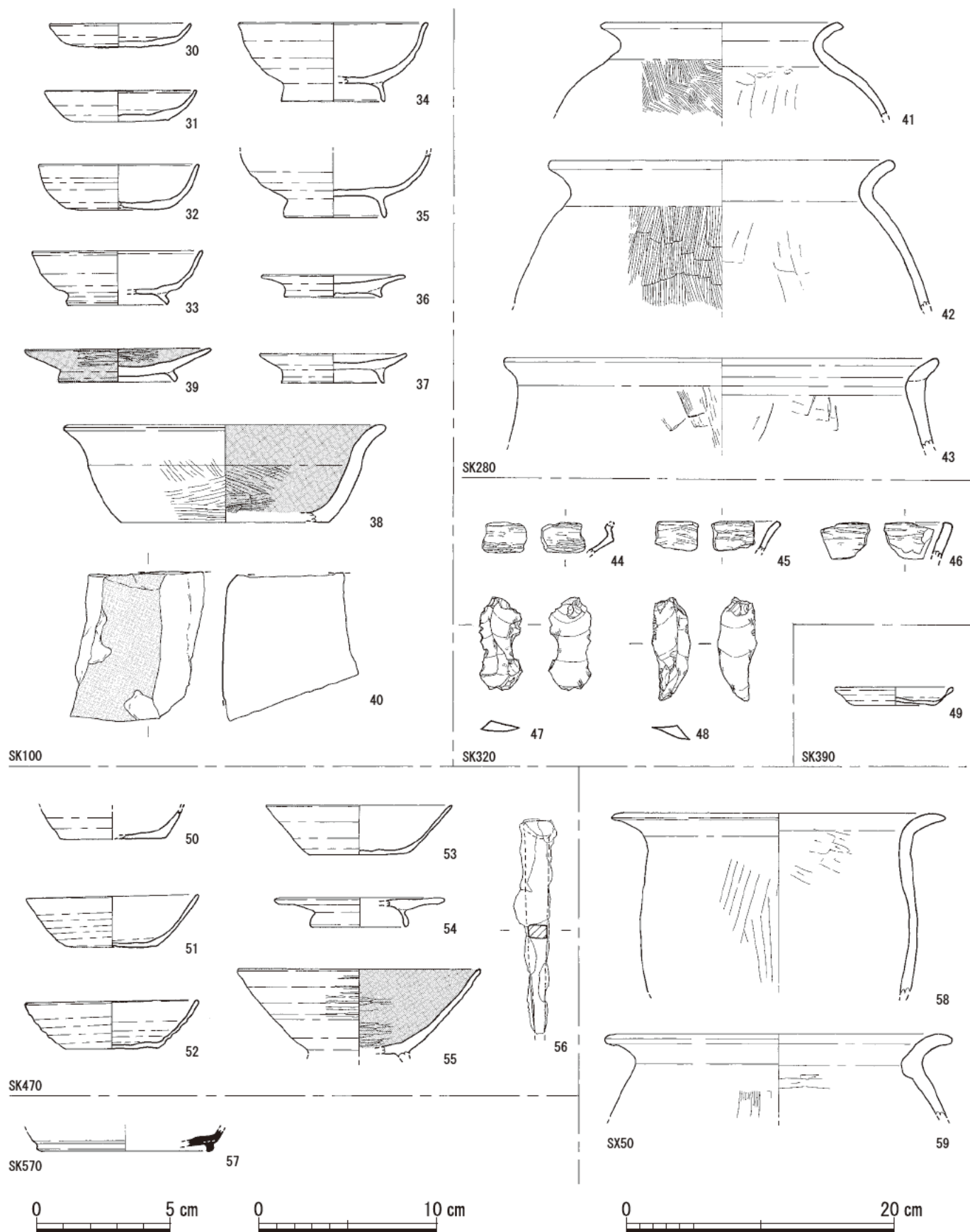
本調査ではパソコンテナー9箱分の遺物が出土した。遺物の大半はS D 500、S K 100、S K 470から出土したもので、土師器が大部分を占める。須恵器・瓦器がこれに次ぐが相対的に少なく、その他の遺物についても同様である。この他に押型文を施した縄文土器、緑釉陶器を採集したが、細片のため図化に堪えない。以下、主要遺物について記す。

2～26はS D 500出土遺物。3～6は小皿で、3の口縁端部は工具により沈線を巡らした京都系土師器である。4・5は糸切り底で、6はヘラ切りである。4・6には板目も残る。7～16は土師器の坏。口径14.6～16.0cm、底径9.3～10.7cm、器高2.3～3.7cmを測る。底部処理はヘラ切りのもの、糸切りのものが混在するが、すべて板目が残存する。底部の形状は平底のものと、12・16のように内面底部が指頭によって押圧され、丸底気味のものがある。17～22は瓦器埴。口径15.4～16.6cm、高台径5.5～7.5cm、器高4.4～5.9cmを測る。いずれも底部を押し出し丸底とし、底部外面に高台を貼り付ける。ミガキによる器面調整は斉一性を欠く。23は白磁皿。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直行する。底部外面は釉を掻き取る。25は滑石製鍋の転用品と推察されるが、用途は不明。表面にはノミ状工具による細かなケズリが施される。**27～29**はS I 555出土遺物。27・28は弥生土器の甕で、27の口縁部はやや外傾してく字状に近くなり、28の底部は平底である。**30～40**はS K 100出土遺物。33～35は土師器の埴で、33の高台は肉厚で低く、坏部は浅い。これに対して、33・34の高台は薄く高い。また、坏部は深く丸みを帯びる。38は黒色土器

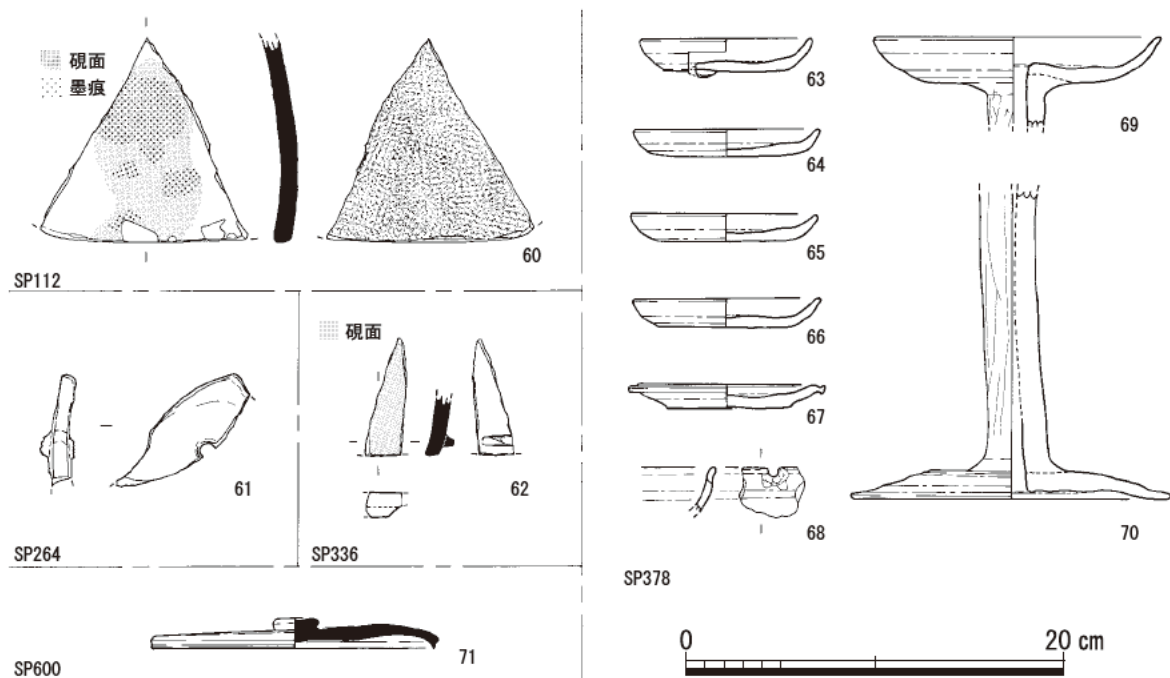
Ⅲ. 調査の記録



第13図 SA200P2、SD500、SI555 出土遺物実測図 (26・29 : 1/2、25 : 1/3、その他 : 1/4)



第14図 SK100・280・320・390・470・570、SX50 出土遺物実測図 (47・48・56 : 1/2、40 : 1/3、その他 : 1/4)



第 15 図 S P 112・264・336・378・600 出土遺物実測図 (1/4)

A類の鉢で、内外ともにハケメ調整を施す。**41～43**はS K 280 出土土器。41・42は土師器の甕で、いずれも外面はハケメ、内面はケズリを施し、42の外面には煤が付着する。**44～48**はS K 320 出土遺物。44～46は縄文土器である。44は浅鉢で、口頸部はやや内傾し、口縁端部で短く外方に屈曲するものと推察され、45・46は素口縁である。すべて器面調整はミガキである。**50～56**はS K 470 出土遺物。50～53は土師器の坏で、51の口縁部には油煙が残存し、53は口縁部内面が煤け、淡く黒化している。**60**はS P 112 出土の猿面硯で、須恵器の甕を転用する。端部は研磨による面取りを行い、硯面には墨痕が残存する。**62**はS P 336 出土の傾斜硯である。底部には正面観で半円状を呈する脚部を貼り付ける。硯面は非常に平滑であり、使用頻度の高さが窺える。**63～70**はS P 378 出土遺物。63～67は土師器の小皿で、口径 9.0～10.5cm、底径 6.4～6.7cm、器高 1.3～1.7cm を測る。67は口縁端部に沈線を施した京都系土師器である。いずれも底部処理はヘラ切りで、65のみ板目がみられる。その他の遺物については、出土遺物観察表も参照いただきたい。なお、遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

*口径(長)・底径(幅)・器高(厚)の単位はcmで、()内の数値は現存値、[]は復元値を示す。

*色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997)による。

*胎土は0.5mm未満の砂粒を微砂粒、1mm未満を細細粒、2mm未満を砂粒とした。

*磁器分類は「大宰府条坊跡X V-陶磁器分類編-」『太宰府市の文化財』第49集(太宰府市教育委員会 2000)による。

*登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 201610 - 000001

調査番号

登録番号

第1表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録 番号
				口径 長	底径 幅	器高 厚	外面	内面	外面	内面			
1 第13図	SA200 P2	土師器	坏	[11.0]	[7.8]	1.8	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000025
2 第13図	SD500	土師器	蓋	[18.6]		(2.1)	にぶい橙	褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	内面スス付着	201610 000083
3 第13図	SD500	土師器	小皿			(1.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	精良	京都系	201610 000075
4 第13図	SD500	土師器	小皿	8.8	5.5	1.2～ 1.35	灰黄褐 褐灰	褐灰 灰褐	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り+板目	201610 000086
5 第13図	SD500	土師器	小皿	9.0	5.5	1.4	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰白	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り	201610 000079
6 第13図	SD500	土師器	小皿	[9.2]	6.5	2.0	橙	橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ 指オサエ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000082
7 第13図	SD500	土師器	坏	14.6	9.3	2.6～ 3.6	灰白 灰黄褐	灰白 灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	精良	底部ヘラ切り+板目 内面コデ当て痕	201610 000084
8 第13図	SD500	土師器	坏	15.0	9.5	2.6～ 3.1	浅黄橙 灰白	浅黄橙	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ ナデ	砂粒	底部ヘラ切り+板目	201610 000091
9 第13図	SD500	土師器	坏	15.1	9.2	2.7	にぶい黄橙 灰黄褐	灰黄褐 にぶい橙	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り+板目 内外面スス付着	201610 000085
10 第13図	SD500	土師器	坏	15.2	9.9	3.0～ 3.3	浅黄橙 にぶい黄橙	褐灰 浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒	底部ヘラ切り+板目	201610 000089
11 第13図	SD500	土師器	坏	15.7	9.2	2.3	浅黄橙	浅黄橙 褐灰	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ ナデ	砂粒	底部ヘラ切り+板目 内面コデ当て痕	201610 000088
12 第13図	SD500	土師器	坏	15.6	9.6	3.1	にぶい黄橙	灰白 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り+板目 内外面スス付着	201610 000078
13 第13図	SD500	土師器	坏	15.6	10.6	2.6～ 3.1	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部ヘラ切り+板目	201610 000094
14 第13図	SD500	土師器	坏	15.8	10.7	3.0～ 3.3	橙 褐灰	橙 褐灰	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部糸切り+板目	201610 000090
15 第13図	SD500	土師器	坏	16.0	10.0	2.9～ 3.0	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部糸切り+板目	201610 000093
16 第13図	SD500	土師器	坏	16.0	10.2	3.2～ 3.7	灰黄 黄灰	灰白 橙	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ ナデ 指オサエ	精良	底部糸切り+板目 内面コデ当て痕	201610 000087
17 第13図	SD500	瓦器	埴	15.4	6.3	5.0～ 5.2	黒褐 黄灰	灰白 黒褐	ミガキ 指オサエ	ミガキ	砂粒	底部ヘラ切り	201610 000092
18 第13図	SD500	瓦器	埴	15.8	5.5	5.8～ 5.9	黄灰 黒	黄灰 黒	ミガキ	ミガキ 指オサエ	精良	底部ヘラ切り+板目 内面コデ当て痕	201610 000080
19 第13図	SD500	瓦器	埴	15.9	7.5	4.95	黄灰 灰白	灰 灰白	ミガキ	ミガキ	精良	底部ヘラ切り 内面コデ当て痕	201610 000096
20 第13図	SD500	瓦器	埴	16.1	5.8	5.4～ 5.6	褐灰 灰白	暗灰	ミガキ	ミガキ 指オサエ	砂粒	底部ヘラ切り	201610 000077
21 第13図	SD500	瓦器	埴	16.3	6.0	5.75	黒 灰白	灰白 灰 黒	ミガキ	ミガキ 指オサエ	精良	底部ヘラ切り+板目	201610 000081
22 第13図	SD500	瓦器	埴	16.6	7.1	4.4～ 4.9	黒 褐灰 にぶい黄橙	黒 褐灰 にぶい黄橙	ミガキ 指オサエ	ミガキ 指オサエ	精良	底部ヘラ切り	201610 000095
23 第13図	SD500	白磁	皿	[10.2]	[3.8]	3.1	灰白	灰白 灰黄	施釉 底部露胎	施釉	灰白 精良	大宰府Ⅶ類	201610 000076
24 第13図	SD500	白磁	碗	[15.6]		(4.9)	灰白	灰白	施釉 下部露胎	施釉	灰白 精良	大宰府Ⅱ類	201610 000073
25 第13図	SD500	滑石	転用品	11.9	8.3	2.1			ケズリ	ケズリ		内外面スス付着	201610 000074
26 第13図	SD500	鉄製品	紡錘車?	3.9	3.8	0.3						20.88g	201610 000071
27 第13図	SI555P1	弥生土器	甕	[18.8]		(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 工具ナデ	精良		201610 000101
28 第13図	SI555	弥生土器	甕		[8.6]	(6.3)	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	刷毛目 ナデ	工具ナデ?	細砂粒		201610 000100
29 第13図	SI555	土製品	投弾	4.2	(2.25)	(1.3)	にぶい黄橙		ナデ				201610 000102
30 第14図	SK100	土師器	小皿	[10.6]	8.0	1.9	橙 にぶい橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000016
31 第14図	SK100	土師器	小皿	[11.4]	6.8	2.4	橙 褐灰	橙 褐灰	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤・黒色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000009
32 第14図	SK100	土師器	坏	[12.0]	[7.8]	3.5	橙 にぶい黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000010
33 第14図	SK100	土師器	埴	[12.8]	[7.8]	4.1	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000013
34 第14図	SK100	土師器	埴	[14.2]	[7.9]	5.9	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000014
35 第14図	SK100	土師器	埴		[7.7]	(4.8)	橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000012
36 第14図	SK100	土師器	托	[10.3]	7.3	1.7	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000015
37 第14図	SK100	土師器	托	[11.2]	7.8	2.3	橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000017
38 第14図	SK100	黒色土器 A類	鉢	[23.4]	[15.5]	7.4	橙	黒褐	刷毛目 ヨコナデ	ヨコナデ 刷毛目	砂粒(雲母、赤・白色粒子)		201610 000018
39 第14図	SK100	黒色土器 B類	托	14.0	8.6	2.6	黒	褐灰 黒	ミガキ	ミガキ	精良		201610 000008
40 第14図	SK100	石製品	砥石	(8.4)	(7.4)	(7.6)							201610 000011

第2表 出土遺物観察表②

遺物 No.	出土 遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録 番号
				口径 長	底径 幅	器高 厚	外面	内面	外面	内面			
41 第14図	SK280	土師器	甕	[17.4]		(7.1)	にぶい赤褐	にぶい黄橙 黒	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ 指オサエ ケズリ	細砂粒(雲母、角閃石、白色粒子)		201610 000030
42 第14図	SK280	土師器	甕	[25.0]		(11.2)	黒 橙	明赤褐 浅黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	砂粒(石英、長石、雲母)	外面スス付着	201610 000031
43 第14図	SK280	土師器	甕	[32.2]		(6.8)	にぶい橙	浅黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	砂粒(石英、長石、雲母、角閃石)		201610 000032
44 第14図	SK320	縄文土器	浅鉢			(2.3)	灰褐 にぶい橙	黒	ミガキ	ミガキ	細砂粒(雲母、白色粒子)		201610 000035
45 第14図	SK320	縄文土器	鉢			(2.2)	灰褐 黒	灰褐	条痕	条痕	細砂粒(雲母、白色粒子)		201610 000037
46 第14図	SK320	縄文土器	鉢			(2.7)	にぶい褐	にぶい褐	条痕	条痕 ナデ	細砂粒(雲母、角閃石、赤色粒子)		201610 000036
47 第14図	SK320	黒曜石	縦長 剥片	3.45	1.6	0.4							201610 000038
48 第14図	SK320	黒曜石	縦長 剥片	3.85	1.45	0.6							201610 000039
49 第14図	SK390	土師器	小皿	[8.8]	6.0	1.4	浅黄橙 黒 にぶい橙	浅黄橙 橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒	底部糸切り+板目	201610 000055
50 第14図	SK470	土師器	坏		[8.0]	(2.2)	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良(雲母、赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000062
51 第14図	SK470	土師器	坏	13.0	7.0	3.7~ 4.0	にぶい黄橙 明黄褐	橙 明黄褐	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目 口縁部油煙付着	201610 000066
52 第14図	SK470	土師器	坏	13.1	6.9	3.5~ 3.7	にぶい黄橙 褐灰	褐灰 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000067
53 第14図	SK470	土師器	坏	[14.0]	7.3	3.8	橙 浅黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良(雲母、赤色粒子)	底部ヘラ切り 内面スス付着	201610 000059
54 第14図	SK470	土師器	托	[12.8]	[7.4]	2.3	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	精良(雲母、赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000063
55 第14図	SK470	黒色土器 A類	埴	[18.3]		(6.6)	黒 灰黄褐	黒	回転ナデ ミガキ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ミガキ	精良(雲母)		201610 000064
56 第14図	SK470	鉄製品	釘	(8.0)	0.7	0.5							201610 000065
57 第14図	SK570	須恵器	高台 付坏		[13.2]	(1.7)	灰	灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部ヘラ切り	201610 000105
58 第14図	SX50	土師器	甕	[25.0]		(13.0)	にぶい黄褐	にぶい黄橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	砂粒(赤色粒子)		201610 000004
59 第14図	SX50	土師器	甕	[26.0]		(7.1)	橙	浅黄橙 橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	砂粒(赤色粒子)		201610 000005
60 第15図	SP112	須恵器	猿面硯	(10.7)	(10.9)	0.8~ 0.9	灰	灰	格子タタキ	当具痕	微砂粒(白色粒子)	内面墨痕・平滑面有	201610 000019
61 第15図	SP264	須恵器	四耳壺			(5.7)	灰		ナデ		砂粒(白色粒子・黒色粒子)		201610 000027
62 第15図	SP336	須恵器	傾斜硯	(6.15)	(2.2)	(1.45)	灰白	灰白 灰黄	ナデ	ナデ	細砂粒(石英、白色粒子)	平滑面有	201610 000040
63 第15図	SP378	土師器	小皿	[9.0]	[6.7]	1.7	褐灰 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000050
64 第15図	SP378	土師器	小皿	[10.0]	[6.4]	1.4	褐灰 灰褐	褐灰 灰褐	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000049
65 第15図	SP378	土師器	小皿	10.0	6.4	1.6	褐灰 にぶい褐	褐灰 橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り+板目	201610 000046
66 第15図	SP378	土師器	小皿	10.0	6.8	1.6	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000047
67 第15図	SP378	土師器	小皿	10.5	6.6	1.3	にぶい橙 橙 黒	にぶい橙 橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)	底部ヘラ切り	201610 000048
68 第15図	SP378	土師器	坏			(2.7)	橙 灰褐	橙	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(赤色粒子)	口縁部一部 打ち欠き	201610 000051
69 第15図	SP378	土師器	器台	[15.2]		(7.8)	浅黄橙 橙 褐灰	にぶい褐 橙 褐灰	回転ナデ ケズリ	回転ナデ ナデ	砂粒(赤色粒子)		201610 000052
70 第15図	SP378	土師器	器台		16.8	(16.6)	にぶい黄橙 橙 褐灰	灰褐 橙	回転ナデ ケズリ	回転ナデ ナデ	砂粒(白色粒子)		201610 000053
71 第15図	SP600	須恵器	蓋	15.2		1.6	黄灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	ツマミ径2.3cm	201610 000107

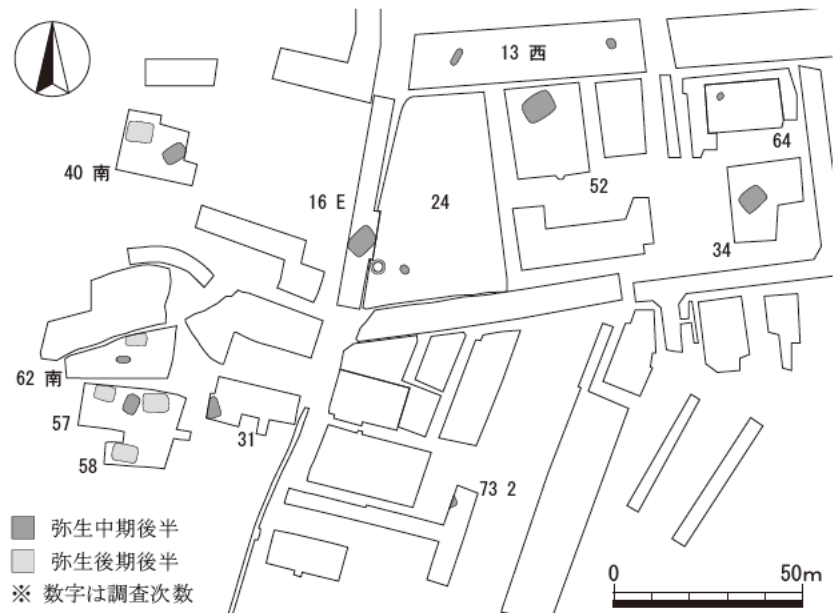
IV. 総括

本調査では、柵列1条、掘立柱建物1棟、竪穴建物2軒、土坑17基、不明遺構1基及びピットを
検出した。最後に、周辺状況を交え、これら遺構の整理を行い、総括としたい。

検出遺構で最も古く位置づけられるものは、縄文時代晩期の所産と考えられるS K 320である。
同時期の遺構は少なく、61 S X 15（第61次調査検出S X 15。以下同様に略称とする。）や、粗製甕
を埋置した石蓋式の甕棺である47 S X 2366等が検出されているのみであるが、当地域の弥生時代開
始直前の様相を知るうえでも、重要である。

次に弥生時代であるが、S I 555 は出土遺物から中期後半と考えられる。周辺では同時期の建物6軒を検出した。57 S I 2451 を除いて主軸方位は西偏し、おおよそ60mの間隔をおいて分布する状況が看取され、土坑を1～2基伴うようである。過去の調査成果によって、これら建物は丹塗り土器を伴った、焼失建物であることが判明している。

その要因としては丹塗り土器



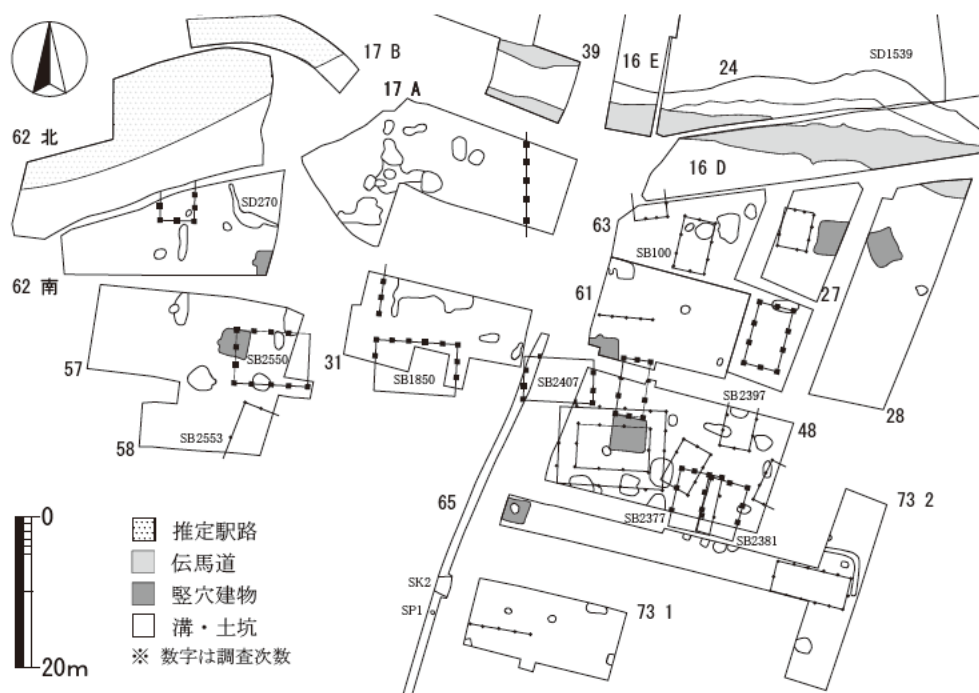
第16図 ヘボノ木遺跡南部弥生時代主要遺構模式図 (1/2,000)

が出土することから、建物廃絶時の祭祀行為の一例と捉えられる。これは、二本木遺跡検出例も含めて、当地域で確認された中期後半の建物の特徴であるが、S I 555 については丹塗り土器及び炭化材は検出されなかった。また、57 S I 2451 についても炭化材は未確認である。前者は遺構の大半が調査区外に延び、且つ埋土中には炭化物が含まれていたため、焼失建物の可能性も残る。後者は主軸方位が異なり、31 S I 1857 に近接することからも、若干の時期差を想定する必要もあろう。

古墳時代は遺構の空白期となっており、この状況は遺跡全体を見ても同様である。その後、古代になり遺構が出現する。S I 250 及びS K 570 は8世紀代の所産で、S X 50 も同時期の可能性がある。S I 250 は出土遺物が希薄であるが、周辺の調査成果からこの時期に位置付けたい。本遺跡の竪穴建物については、その分布状況・各属性・周辺遺跡との関係などの検討により、該期の建物は筑後国府をはじめとした官衙群に関連した居住用としての性格が指摘されている(註1)。

9世紀頃になると、本調査地が位置する南地区では31 S B 1850(5間×3間)、48・65 S B 2407、57 S B 2550(いずれも4間×3間)が造営される。これらは計画的な配置を採る東西棟建物で、その規模からも重要な機能を具有した建物群とみられる。9世紀の遺構はS K 470 と黒色土器A類片が出土したS K 20 及びピットを検出した。ピット出土の傾斜硯や猿面硯はそれら建物群で使用されて廃棄されたものであろう。なお、2区の調査では48 S B 2377・2381の南妻柱列の確認も目的といていたが、柱穴を検出できなかったため、いずれも3間×2間の南北棟建物である可能性が高い。

それらに続くものがS A 200、S K 100 で10世紀に比定され、S K 60 も黒色土器B類片が出土していることから同時期に位置付けた。S B 300 については前代の建物の大半が梁間3間であるのに対して本遺構は2間であること、柱穴が小規模で円形を呈すること、また、出土した土師器坏の底部処理にはヘラ切りしか確認できないことから10世紀～11世紀の年代が与えられる。この建物に概ね直交するものとして、48 S B 2397、63 S B 100 が検出されており、後者は出土遺物から10世紀の



第17図 ヘボノ木遺跡南地区歴史時代主要遺構模式図 (1/1,000)

所産と考えられる。また、58 S B 2553 は長沙窯系黄釉褐彩陶器などが出土しており10世紀後半の年代が与えられている。この時期は、前半に筑後国府Ⅱ期政庁が終焉を迎え、後半に朝妻地区でⅢ期政庁が造営される時期にあたる。本地区は井田川を挟んで朝妻地区の対岸

にあたる東側に位置していることから、Ⅲ期政庁造営とその機能時には当地に大きな影響を与えていたことは、想像に難くない。その最たる例が、Ⅲ期政庁造営等に関わる祭祀に使用されたと思われる 65 S K 2 出土の一括資料で、周辺にもⅢ期政庁に係る施設が展開していた可能性があり、その主要施設の一つに 48 次調査地の四面廂建物が想定される。

最後に、12 世紀の遺構は S D 500、S K 385・390 を検出した。S D 500 は出土した土師器の半数に糸切りが観察され、瓦器塼と白磁からも 12 世紀後半頃には廃絶したものと考えられる。本遺構と同時期の溝は 62 S D 270 があり、形状も類似する。但し、62 S D 270 は土壌墓との関係から葬送儀礼に関わる「鍵水」遺構と捉えられており、遺物出土状況が大きく異なっているため、本遺構の性格までは言及し難い。S K 385・390 は焼土や炭化物も出土していることから廃棄土坑と考えられ、検出位置は隣接し形状も似ているため併存した可能性がある。この他には京都系土師器皿の B 類(註2)が出土した S P 378 を検出した。また、S D 500 から 1 点、周辺では 65 S P 1、24 S D 1539 から各 1 点が出土した。一方、井田川左岸の「在国司居屋敷」の東端部と考えられる筑後国府跡第 274 次調査地では各遺構に伴い 35 点が確認された。本遺跡出土例は少量ながら、当地域における京都系土師器皿の成立時期とその背景について推定し得る好資料となる。

過去の調査成果から明らかなように、以後、本遺跡では殆ど遺構が見られなくなり、本調査地も例外ではない。これは、先学が示すように筑後国府Ⅲ期政庁の移転にはじまり、駅路機能の希薄化等を要因とし、墓地や土坑が営まれるなど、小規模な集落の片鱗を残すのみとなる。

(註1) 神保公久「筑後国府と周辺の堅穴建物」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会 2011

(註2) 白木 守「Ⅳ. 筑後国府跡第229次調査 4. まとめ」『久留米市文化財調査報告書』第295集 久留米市教育委員会 2010

写 真 图 版



(1) 調査地から筑後国府Ⅲ期政庁跡（写真中央）、朝妻の清水（写真左林）方面を望む（北東から）



(2) 1区全景（南西から）

図版 2



(1) 2区全景 (南西から)



(2) S A200 完掘状況 (南西から)



(3) S B300 完掘状況 (南西から)



(4) S D500A - A' 間土層 (北東から)



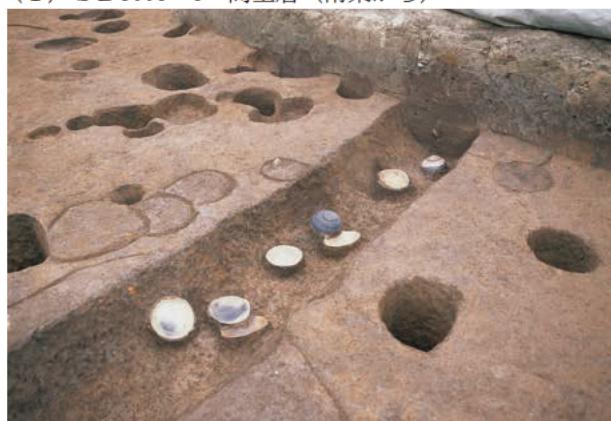
(5) S D500B - B' 間土層 (北西から)



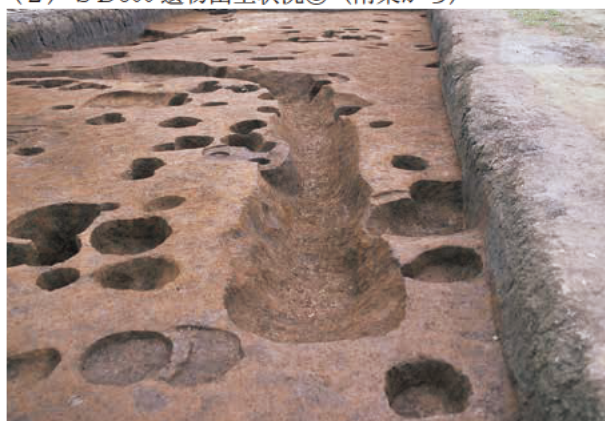
(1) S D500C - C' 間土層 (南東から)



(2) S D500 遺物出土状況① (南東から)



(3) S D500 遺物出土状況② (北東から)



(4) S D500 完掘状況① (南東から)



(5) S D500 完掘状況② (西から)



(6) S I 250 完掘状況 (南西から)



(7) S I 555 完掘状況 (北東から)

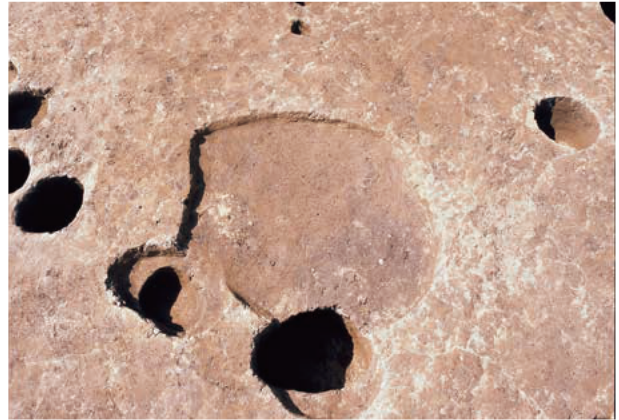


(8) S K12 完掘状況 (北東から)

図版 4



(1) S K20 完掘状況 (東から)



(2) S K60 完掘状況 (南東から)



(3) S K100 土層 (南東から)



(4) S K100 完掘状況 (南西から)



(5) S K120 完掘状況 (北から)



(6) S K280 完掘状況 (南東から)



(7) S K320 完掘状況 (北西から)



(8) S K350 焼土検出状況 (東から)



(1) S K350 完掘状況 (東から)



(2) S K375 完掘状況 (南東から)



(3) S K380 完掘状況 (北西から)



(4) S K385 完掘状況 (南西から)



(5) S K390 完掘状況 (南西から)



(6) S K470 土層 (南東から)



(7) S K470 遺物出土状況 (南東から)



(8) S K495 完掘状況 (東から)

図版 6



(1) SK505 完掘状況 (北東から)



(2) SK560 完掘状況 (西から)



(3) SK570 完掘状況 (北から)



(4) SX50 粘土塊検出状況① (南西から)



(5) SX50 粘土塊検出状況② (南西から)



(6) SX50 完掘状況 (南西から)



(7) SP378 遺物出土状況① (南東から)



(8) SP378 遺物出土状況② (北東から)



図版 8



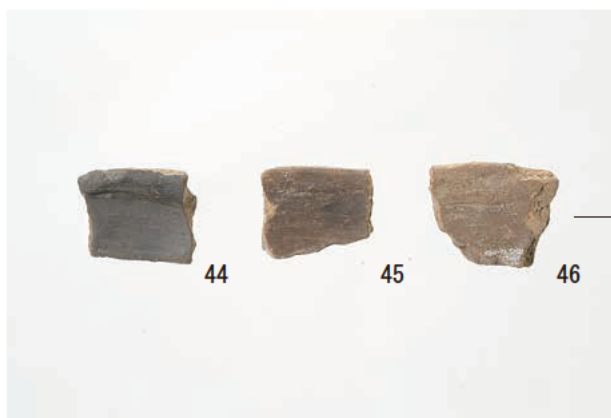
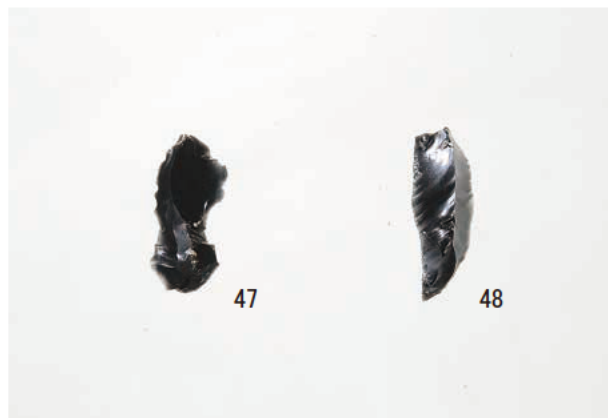


図版 10





図版 12





图版 14



報 告 書 抄 録

ふりがな	へぼのきいせき だいななじゅうさんじ はつくつちようさほうこく
書 名	へボノ木遺跡 -第73次発掘調査報告-
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第394集
編著者名	廣木 誠
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2018 (平成30) 年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へぼのきいせき へボノ木遺跡 だいな じちようさ 第73次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 ひがしあいはらさんちゆうめ 東合川三丁目209外	40203	—	33 ° 18 ' 46 "	130 ° 32 ' 59 "	20160801 ～ 20161028	542 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
へボノ木遺跡 第73次調査	集落	縄文 弥生 古代 中世	柵列 掘立柱建物 溝 竪穴建物 土坑 不明遺構	1条 1棟 1条 2軒 17基 1基	縄文土器、弥生土器、 土師器、黒色土器、須 恵器、国産陶器、輸入 陶磁器、古瓦、石製品、 鉄製品		8世紀後半から9世紀 にかけて営まれた主要施 設 S B 1850、S B 2407、 S B 2550の南東部の状況 確認を主目的とした。結 果、遺構は散見される程 度であり、建物の周辺で は土地利用に際し、何ら かの規制が働いていたと 想定される。	
要 約								
調査地は高良山から北西に派生した標高13m前後の低位段丘上に立地する。本調査は、へボノ木遺跡南地区で確認された9世紀頃の主要施設である第31次調査 S B 1850、第48・65次調査 S B 2407、第57次調査 S B 2550の南東部の状況確認を主目的とした。結果、土坑及びピットを検出したのみであり、主要施設の周辺では土地利用に際し、何らかの規制が働いていたと想定される。また、ピットからは傾斜硯や猿面硯が出土し、それら建物で使用され廃棄されたと推察される。この他、縄文時代、弥生時代及び10～12世紀代の遺構を検出し、その分布状況を把握することができた。								
土木工事の届出日		平成28年5月18日			遺物の発見通知日		平成28年11月2日 (28文財第1132号)	

へボノ木遺跡

— 第 73 次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第 394 集

平成 30 年 3 月 30 日

発 行 久 留 米 市 教 育 委 員 会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 赤穂印刷株式会社